

＜社説＞週のはじめに考える ベルの鳴る日を夢見て

2022年12月4日 07時46分



十二月に入って、あちこちから「ジングルベル」が聞こえる頃となりました。ですが、今日のこの欄は「なかなか鳴らないベル」の話をお伝えしたいと思います。

作曲家の笠松泰洋(やすひろ)さんをご存じでしょうか。埼玉県在住で、純粋器楽から舞台音楽まで実に幅広く手がけています。劇団四季の芝居「恋におちたシェイクスピア」の音楽もこの人です。二〇一八年度には「文化交流使」として文化庁からペルーなど南米の四カ国と、英国とオーストリアに派遣され、数多くの演奏会を開きました。

「音楽の都」のウィーンでは、自作のオペラ「人魚姫」を上演。大成功します。この演奏会の後で笠松さんは、主役のソプラノ歌手ナタリア・ステパンヤックさんにこう言われました。私の故郷で、「人魚姫」を上演したい、と。

ナタリアさんの故郷の街の名はリビウ。ウクライナの西部にある文化の薫り豊かな古都です。

◆コロナ禍で消えた公演

いったんは、二〇年二月に上演されることが決まったのですが、開演のベルが鳴る日を夢見ていた笠松さんは、落胆することになります。新型コロナの急な広がりで公演ができなくなったのです。

日本での音楽会も次々に中止。作曲による収入は途絶えました。日本を代表して海外に派遣されたほどの作曲家が、一時は音楽とは無縁の学習塾でアルバイトをしてしのぐ苦境に陥ります。

そのコロナ禍も次第に収まり、「いよいよリビウでの公演を」と思っていたところに届いたのが、今年二月のウクライナへのロシア侵攻という最悪の報。開演ベルはまたもや遠のいてしまいました。

でも笠松さんはくじけません。九月には自分の故郷の福井市で、新作ミュージカル「雪の女王」の初演を成功に導くなど、ますます仕事に打ち込んできました。

そして十一月。ナタリアさんが「そう遠くないうちに、オペラをリビウで上演することになる」と伝えてきました。ウィーンに住む別のウクライナの歌手からも新たに「人魚姫」を歌いたいと連絡があったため、楽譜を送りました。

半年近くも続いた文化交流使の活動では、生活習慣も文化も全く違う国々に音楽だけを頼りとして飛び込んでいき、現地の演奏者や音楽を指導した子たちから大歓迎された笠松さん。

「音楽に国境はない」。そんな言葉をあらためて思い起こさせるこの人の活動が実を結び、いつかウクライナに「人魚姫」の歌声が響く日を待ちたいと思います。

一方で、待ちわびていた開演のベルを聞いた人たちもいます。

十一月のこと。静岡県を拠点とするプロのオーケストラ「富士山静岡交響楽団」が、静岡と浜松の両市で演奏会を開きました。曲はハイドンの「天地創造」。独唱者三人に合唱団が加わる大曲です。

この公演は、県民参加の合唱団との共演で、二〇年九月に開催の予定でした。しかしこちらもまたコロナ禍のため曲目が変更され、今年ようやく演奏できたのです。

もっとも、念願の公演でしたが合唱団員たちは歌う時も含めて、舞台上ではずっとマスクを着用。感染症の対策ですが、せっかくの歌声の魅力が減じたようでした。

◆演奏会場の温かい拍手

さらに会場では、空席がかなり目立ちました。クラシック音楽の聴衆は年配の方が多いのですが、そうした年代の人たちが会場での感染を恐れて、演奏会に行くのを敬遠しているようなのですね。

しかし演奏は実に見事なもの。浜松の公演では演奏の済んだ後、合唱団員がみんな舞台を去るまで聴衆の温かい拍手が続きました。

今回の公演の指揮者は、楽団の首席指揮者を務める高関健さん。全国のオーケストラから招かれるこの名匠も、合唱の付く曲を指揮するのは、年末恒例の「第九」を除けば三年ぶりなのだとか。そのことから、コロナ禍が音楽界に与えた影響のほどが分かります。

終演後、合唱団を控室に訪ねた高関さんは、こんなふうにあいさつをしました。「コロナ禍の第八波が言われますが、これを過ぎれば、光が見えてくると思います」と。そして、こう締めくくりました。「また一緒にやりましょう！」

その呼びかけが実現し、いつかマスクなしでの歌声が聴けるよう心から祈りたいと思います。

また笠松さんとナタリアさんをはじめ、今ではウクライナの敵となったロシアの人も含めて世界の音楽家がともに開演ベルを聞き、ともに奏で、歌い、喝采を浴び、「また一緒にやりましょう！」と誓える日が来るよう、祈ります。